

様式1 平成 29年度 山梨県立富士見支援学校本校評価報告書(自己評価・学校関係者評価)

学校目標・経営方針	子どもたちの病状に配慮し、健康の回復を図りながら、義務教育における学習空白を補完するとともに、社会の中で人と関わりながら生きていくための力を育む。
-----------	---

山梨県立富士見支援学校校長 石原 一彦

本年度の重点目標	1 児童生徒の実態に即した支援や学習指導を行い、一人一人の確かな学力を育む。 2 健やかな心身の涵養とよりよい人間関係の形成を図り、社会に参加する態度を育成する。 3 病弱児教育に関する専門性の充実を図り、信頼される学校づくりを行う。
----------	---

達成度	A	ほぼ達成できた。(8割以上)
	B	概ね達成できた。(6割以上)
	C	不十分である。(4割以上)
	D	達成できなかった。(4割以下)

評価	4	良くできている。
	3	できている。
	2	あまりできていない。
	1	できていない。

自 己 評 価						
番号	評価項目	本年度の重点目標 具体的方策	方策の評価指標	年度末評価(12月20日現在)		
				自己評価結果	達成度	成果と次年度への課題・改善策
1	児童生徒の実態に即した支援や学習指導を行い、一人一人の確かな学力を育む。	合理的配慮を踏まえた個別的教育支援計画を作成し、個別の指導計画に基づいた学習の状況や結果を適切に評価し、指導の改善を図る。 ICT教材の活用や体験的活動など、指導法を工夫することにより、わかる喜びを実感できる授業を行い、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る。	児童生徒・保護者アンケート、学部会での検証(満足度80%) 児童生徒・保護者アンケート、学部会での検証(満足度80%)	・個別的教育支援計画については、個々の児童生徒の病状の変化等を十分考慮しつつ作成した。主に、進学・卒業に向けた転出時の資料として活用がなされたことは有意義であった。 ・客観的な指標に基づいた個別の指導計画を、各児童生徒の教科毎に作成している。詳細な記述を基に、諸会議等を通して活発な意見交換がなされた結果、日々の指導に役立てていく。 ・「合理的配慮」や「授業を含めた児童生徒の生活全般にかかわる支援」という視点を設けて、校内研究会において授業実践を発表し、討議の柱の一つに据えて論議した。前籍校あるいは異校種どちらか1回以上授業参観することで、授業力を高める一助につながった。	A	・個別的教育支援計画については、本人と保護者の状況を十分考慮した上で、全児童生徒の作成を目指している。 ・他の支援学校に比べてITの授業が少ない。引き続き定期的な会議や研修の場等を設け、複数の目で個々の教師が実践する指導・支援の妥当性を検証していく必要がある。 ・校内研究会での授業実践報告や、前籍校等への授業参観を通して、授業力の向上につながった。次年度は、今年度の「研究テーマ」と一人一実践の提案という「研究方法」を継続する。「学部全体で取り組む」という体制も継続する。
2	健やかな心身の涵養とよりよい人間関係の形成を図り、社会に参加する態度を育成する。	教育課程に児童生徒の病態を考慮した系統的・体系的なキャリア教育を位置づけ、その充実を図る。 保健教育や道徳教育を通して、自他を大切にすることを育て、基本的な生活習慣を身につけさせる。	児童生徒・保護者アンケート、学部会での検証(満足度80%) 児童生徒・保護者アンケート、学部会での検証(満足度80%)	・各学部ごと及び段階別ごとにつけさせたい力を確認し、自立活動やその他の学校生活の指導において参考にすることができた。 ・進路指導年間計画も参考にしながら各学年ごと実態に合わせて取り組むことができた。児童生徒の意向に添いながら合意形成を図った。 ・養護教諭による保健指導、教科や自立活動を通して心身の状況把握や課題に向けた取り組みを行うことができた。 ・道徳教育全体計画に基づき行った。学園祭や愛校作業など学校行事の中で体験的に学び社会性を育むことができた。	A	・引き続き、丁寧に説明し職員全体でねらいの確認を行う。また、児童生徒それぞれの個別のねらいも共有しながら、学校全体で指導できる環境にしていける。 ・キャリア教育の全体計画については、毎年しっかり精査し、本校の実態にあったものにしていく。 ・医療や保護者と密に連携する中で心身の状況を把握、調整し、学習活動につなげていく。 ・道徳教育全体計画に沿い、学級活動や学校行事を通して体験的に学び、生活の中での実践につなげていく。
3	病弱児教育に関する専門性の充実を図り、信頼される学校づくりを行う。	積極的な情報発信を行い、病弱児教育への理解と啓発に努めるとともに、関係機関との連携を充実させる。 教育委員会による「高校生こころのサポートルーム活用事業」により、本校が高校生こころのサポートルームの運営主体となったことに伴い、関係機関及び高等学校との連携をさらに深め、相談支援の充実を努める。	児童生徒・保護者アンケート、学部会での検証(満足度80%) 児童生徒・保護者アンケート、学部会での検証(満足度80%)	・HPやブログ、学校だより等内容の充実を図り、本校の教育の情報発信に努めた。 ・病弱連携協議会は、医療・福祉・教育関係者や市町村教育委員会の理解協力のもと運営実施し、病弱学級担当者との連携強化、資質向上につながった。 ・本格実施から3年目となり、依頼件数、対応件数共に年々増加し、県内全域から相談が寄せられた。 ・在籍校や関係機関と丁寧に情報共有することで、生徒支援に直接あたる教員の理解を深め、教員の支えに繋げることができ、事業の目的達成に貢献した。また高校の相談支援体制の構築や充実につながった。	A	・HP等は引き続き内容の充実を図り、最新の情報発信を行っている。 ・病弱教育が多様化する中で、より広く高い専門性が求められる。様々なネットワークを強化し、参加者のニーズや状況に応じた研修会の実施や情報提供を行っている。 ・事業については浸透しつつあるが、担当者が替わると支援が途切れる場合もあるため、来年度も周知に取り組む。 ・来年度も高校教育課には支援検討会に出席していただき、高校への助言をお願いするとともに、高校及び関係機関と連携しながら、迅速で適切な、しかも丁寧な支援を実施していく。

学校関係者評価	
実施日 (平成30年2月20日)	
評価	意見・要望等
4	・一人一人の事情や状況に合わせて教育支援計画を作成し、実行できている。また通常の方法では学習が難しい児童に対しても指導方法を工夫している。 ・数値目標(到達率80%以上)は達成されており、かつ、教科領域指導や特別活動では前回の評価に比べてポイントの上昇が見られている。また児童生徒へのアンケートでも対象者全員が「わかりやすい」と評価していることから一人一人の教育的ニーズに応じた質の高い教育が展開されていると考えられる。今後さらに、教育の質を高めるためのビジョンの共有を教職員間で行っていくことを望んでいる。
4	・子どもたちと信頼関係がしっかり築け、生活面や道徳面においても成長を促せている。 ・支援学校らしいいじめがない素敵な環境が作られている。難しい生徒が増えているのか進路指導に苦慮する事例があった。対策を検討する必要があるかもしれない。
4	・原籍校へ必要な情報や助言ができており、連携もしっかりされている。また今まで相談機関のなかった高校生への対応も順調に進んでいる。 ・様々なニーズに対して関係機関と連携しながら適切な支援を展開されていると思う。ICFモデルに基づく子ども理解やチーム支援・UDを取り入れた授業づくりなど小中高校への理解啓発を推進されることを期待している。

留意点 (1)重点目標と評価項目については、各学校の現状と課題に基づき、実情に合わせて重点化し、設定する。

(2)学校関係者評価については、年度当初に今年度の重点目標の現状と具体的対策を説明し、評価に必要な情報提供を計画的に行う。学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価委員会等を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。